

鳶の門

岡本かの子

青空文庫

私の住む家の門には不思議に蔦つたがある。今の家もさうであるし、越して来る前の芝、白金しろがねの家もさうであつた。もつともその前の芝、今里の家と、青山南町の家とには無かつたが、その前にゐた青山隠おんでん田の家には矢張り蔦があつた。都会の西、南部、赤坂と芝とを住み歴へる数回のうちに三ヶ所もそれがあるとすれば、蔦の門には余程縁のある私である。

目慣れてしまへば何ともなく、門の扉いただきの頂より表と裏に振り分けて、若人の濡ぬれ髪を干すやうに門かぬきの辺まで鬱うつそう蒼と覆ひ掛り垂れ下る蔓葉つるの盛りを見て、たゞ涼しくも茂るよと感ずるのみであるが、たま〜家族と同伴して外いに出で立つとき誰かゞ支度が遅

く、自分ばかり先立つて玄関の石畳に立ちあぐむときなどは、焦い立つらだ気持ちをこの葉の茂りに刺し込んで、強しひて蔦の門の偶然に就いて考へてみることもある。

結局、表扉を開いて出入りを激しくする職業の家なら、たとへ蔦の根はあつても生え広がるまいし、自然の做なすまゝを寛容する嗜癖しへきの家族でなければかういふ状態を許すまい。蔦の門には偶然に加ふるに多少必然の理由はあるのだらうか——この私の自問に答へは甚はなはだ平凡だつたが、しかし、表門を蔦の成長の棚床に閉ぢ与へて、人間は傍の小さい潜くぐり門もんから世を忍ぶものゝやうに不自由勝ちに出入するわが家のものは、無意識にもせよ、この質素な蔦を眞実愛してゐるのだつた。ひよつとすると、移転の必要あ

るたび、次の家の探し方に門に蔦のある家を私たちは黙契のうちに条件に入れて探してゐたのかも知れない。さう思ふと、蔦なき門の家に住んでゐたときの家の出入りを憶ひ返し、丁度女が額の真廂をむきつけに電燈の光で射向けられるやうな寂しくも氣うとい感じがした。そして、従来 of 経験に依ると、さういふ家には永く住みつかかなかつたやうである。

夏の葉盛りには鬱青の石壁にも譬へられるほど、蔦はその肥大な葉を鱗状に積み合せて門を埋めた。秋より初冬にかけては、金朱のいろの錦の蓑をかけ連ねたやうに美しくなつた。霜の下りる朝毎に黄葉朽葉を増し、風もなきに、かつ散る。冬は繊細執拗に編み交り、捲いては繕れ戻る枝や蔓枝だけが残り、原始時

代の大匍足類ほそくるいの神経か骨が渴化して跡をとゞめてあるやうで、節々に吸盤らしい刺立ちとげもあり、私の皮膚を寒氣立たした。しかし見方によつては鋼はがねの螺線らせんで作つたルネサンス式の図案様式の扉にも思へた。

蔦を見て楽しく爽さわやかな気持ちをするのは新緑の時分だつた。透き通る様な青い若葉が門扉もんぴの上から雨後の新滝のやうに流れ降り、その萌黄もえぎいろから出る石せき竹色ちくの蔓つる尖さきの茎こゝろや芽いは、われ勝ちに門扉の板の空所を匍はひ取らうとする。伸びる勢いきおいの不揃ふぞろひなところが自由で、稚おさなく、愛らしかつた。この点では芝、白金の家の敷地の地味はもつともこの種の蔓の木によかつたらしく、柔かく肥ふとつた若葉が無数に蔓からで絡まり合ひ、一握りづつの房になつて長短を

競はせて門扉にかゝつた。

「まるで私たちが昔かけた房附きの毛糸の肩掛けのやうでござい
ますね」

自然や草木に対してわり合ひに無関心の老婢ろうひのまきまでが美事
な蔦に感心した。晴れてまだ晩春の朧ろうたさが残つてゐる初夏の或
る日のことである。老婢は空の陽を手庇てびさしで防ぎながら、仰いで
蔦の門扉に眼をやつてゐた。

「日によると二三寸すんも一度に伸びる芽尖めさきがあるのでございます。
草木もかうなると可愛かわゆいものでございますね」

性急な老婢は、草木の生長の速力が眼で計れるのに始めて自然
に愛を見出みいだして来たものゝやうである。正直ものでも兎角とかく、一徹

に過ぎ、ときにはいこぢにさへ感ぜられる老婢が、そのため二度も嫁入つて二度とも不縁に終り、知らぬ他人の私の家に永らく奉公しなければならぬ、性格の一部に何となくエゴの殻をつけてゐる老年の女が、この蔦の芽にどうやら和やかな一面を引き出されたことだけでも私には愉快だつた。また五十も過ぎて身寄りとは悉く仲違ひことごとをしてしまひ、子供一人ない薄倅はっこうな身の上を彼女自身潜在意識的に感じて来て、女の末年の愛を何ものかに向つて寄せずにはゐられなくなつた性情の自然の経過が、いくらこんなことでもこゝに現はれたのではないかと、憐れあわにも感じ、つく／＼老婢の身体を眺めやつた。

老婢の身体つきは、だいぶ老齡の女になつて、横顔あぐこの顎の辺に

二三本、ちやいろ褐色のたてすじ豎筋が目立つて来た。

「蔦の芽でも可愛がつておやりよ。おまへの気持ちの和みにもなるよ」

老婢は「へえ」と空返事からをしてゐた。もうこの蔦に就いて他のことを考へてゐるらしかった。

その日から四五日経た午後、門の外で老婢が、がみく／＼叫んでゐる声が出た。その声は私の机のある窓近くでもあるので、書きものゝ気を散らせるので、止めて貰もらはうと私は靴を爪先つまさきにつきかけて、玄関先へ出てみた。門の裏側の若蔦の群は扉を横匍よこばひに

匍ひ進み、^{みさぎ}崎と崎にせかれて、その間に干潮を急ぐ海流の形のやうでもあり、大きくうねりを見せて動いてゐる潮のやうでもある。空間にあへなき支点を求めて^{おぼつか}覚束なくも微風に揺られてゐる搔^かきつき^{あま}剩つた新蔓は、潮の飛沫^{しぶき}のやうだ。机から急に立上つた身体の動揺から私は軽微の眩暈^{めまい}がしたのと、久し振りにあたる明るい陽の光の刺戟^{しげき}に、苦しいより却^{かえつ}て揺蕩^{ようとう}とした恍惚^{こうこう}に陥つたらしい。そのまゝ^{たたず}佇んで、しめやかな松の初花の樹脂臭^{くさ}い匂ひを吸ひ入れながら、門外のいさかひを聞くと聞かぬともなく聞く。「えゝゝ、ほんとに、あたしぢやないのだから。よその子よ。そしてそのよその子、あたし知つてるよ」

早熟^{ませ}た口調で言つてゐるのはこの先の町の葉茶屋の少女ひろ子

である。遊び友達らしい子供の四五人の声で、くすくす笑ふのが少し遠く聞える。

「嘘だろ！ 両手を出してお見せ」と言つたのは老いたまきの声である。もうだいぶ返答返しされて多少自信を失つたまきはしどろもどろの調子である。

「はい」少女はわざと、いふことを素直に聴く良い子らしいこわね声音を装つて返事しながら立派に大きく両手を突出した様子が蔦の門を越した向うに感じられた。たちま忽ち当惑したまきの表情が私に想像される。老婢は「ふうむ」とうなつた。

また、くすくす笑ふ子供たちの声が聞える。

私も何だか微笑が出た。ちよつと間を置いて、まきはいきおい勢づき

「ぢや、この蔦の芽をちよぎつたのは誰だ。え、そいつてごらん。え、誰だよ、そら言へまい」

「あら、言へてよ。けど言はないわ。言へばをばさんに叱しかられるの判つてゐるでせう。叱られること判つてゐながら言ふなんて、いくら子供だつて不人情だわ」

「不人情、は は は は」と女の子たちは、ひろ子の使つた大人らしい言葉が面白かつたか、男のやうな声をたてゝ一せいに笑つた。

まきはいきり立つて「この子たち口減らずといつたら——」まきの憤慨してゐる様子が私にも想像されたが、すべてのものから孤独へはふり捨てられたこの老女は、やはり不人情の一言には可

なり刺激を受けたらしい。「早く向うへ行つて。おまへなど女弁士にでもおなり」と叱り散らした。

もう、そのとき、ひろ子はじめ連れの子供たちは逃げかかつて、老婢より相当離れてゐた。老婢はまた懐柔して防ぐに之くはないと氣を更へたらしく、強ひて優しい声を投げた。

「ねえ、みんな、おまへさんたちいゝ子だから、この蔦の芽を摘むんぢやないよ。ほんとに頼むよ」

流石の子供たちも「あゝ」とか「うん」とか生返事しながら馳せ去る足音がした。やつと私は潜戸を開けて表へ出てみた。

「ばあや、どうしたの」

「まあ、奥さま、ご覽遊ばせ。憎らしいつたらごさいません。ひ

ろ子が餓鬼^{がき}大将で蕙の芽をこんなにしてしまったのでございます。わたくし、親の家へ怒鳴^{どな}り込んでやらうと思つてゐるんでござい
ます」

指したのを見ると、門の蕙は、子供の手の届く高さの横一文字の線にむしり取られて、髪のおかつばさんの短い前髪^{そろ}のやうに揃つてゐた。流行を追うて刈り過ぎた理髪^{こつけ}のやうに軽^{けい}佻^{ちよう}で滑稽^{こつけ}にも見えた。私はむつとして「なんといふ、非道^{ひど}いこと。いくら子供だつて」と言つたが、子供の手の届く範囲を示して子供の背丈^{いたず}けだけに摘み揃つてゐる蕙の芽の摘み取られ方には、悪^{いたず}戯^らは悪戯でもやつぱり子供らしい自然さが現れてゐて、思ひ返さずにはゐられなかつた。

「これより上へ短くは摘み取るまいよ。そしてそのうちには子供だから摘むのにもぢき飽きるだらうよ」

「でも」

「まあ、いゝから……」

ひろ子の家は二筋三筋へだた距つた町通りに小さい葉茶屋の店を出してゐた。あががまち上り框と店の左横にさゝやかな陳列硝子戸棚ガラスを並べ、その中に進物用の大小の円まるかん罐や、包装した箱が申もうしわけ 訊きだけに並べてあつた。

楽らく焼やきの煎茶せんちや道具ひとそろ一揃ひとそろひに、茶の湯用の漆塗うるしりの棗なつめや、竹

の茶ちやせん筥ほこりが埃かむを冠かむつてゐた。右側と衝き当りに三段の棚があつて、上の方には紫の紐ひもつき附の玉露ぎよくろの小壺つぼが並べてあるが、それと中段の煎茶の上等が入れてある中壺は滅多めったに客の為め蓋ふたが開けられることはなく、売れるのは下段の大壺の番茶が主だつた。徳用の浜茶や粉茶も割合に売れた。

玉露の壺は単に看板で、中には何も入つてなく、上茶も飛切りは壺へ移す手数を省いて一々、静岡の仕入れ元から到着した錫張すずばりの小箱の積んであるのをあれやこれやと探し廻つて漸ようやく見付け出し、それから量はかつて売つて呉くれる。だから時間を待たして仕様がなないと老婢ろうひひのまきは言つた。

「おや、おまへ、まだ、あすこの店へお茶を買ひに行くの」と私

は訊きいてみた。「あすこの店はおまへの敵かたきやくの子供がある家ぢやない」

すると、まきは照れ臭さうに眼を伏せて

「はあ、でも、量りがようございますから」

と、せい／＼頭を使つて言つた。私は多少思ひ当る節ふしが無いでもなかつた。

蔦の芽が摘まれた事件があつた日から老婢まきは、急に表門の方へ神経質になつて表門の方に少しでも子供の声がすると「また、ひろ子のやつが——」と言つて飛出して行つた。

事実、その後も二三回、子供たちの同じやうな所業があつたが、しかし、一月も経たたぬうちに老婢の警戒と、また私が予言したや

うに子供の飽きつぽさから、その事は無くなつて、門の蕙の芽は摘まれた線より新らしい色彩で盛んに生え下つて来た。初はつぜみ蟬が鳴き金魚売りが通る。それでも子供の声がすると「また、ひろ子のやつが——」と呟つぶやきながらまきは駆け出して行つた。

子供たちは遊び場を代へたらしい。門前に子供の声は聞えなくなつた。老婢ろうひは表へ飛出す目標を失つて、しよんぼり見えた。用もなく、厨くりやの涼しい板の間にぺたんと坐すわつてゐるときでも急に顔を皺しわめ、

「ひろ子のやつめ、——ひろ子のやつめ、——」

と独り言のやうに言つてゐた。私は老婢がさん／＼こごと小言を云つたやうなきつかけで却かえつて老婢の心にあの少女が絡からみ、せめて

少女の名でも口に出さねば寂しいのではあるまいかとも推察した。だから、この老婢がわざ／＼幾つも道を越える不便を忍んで少女の店へ茶を求めに行く気持ちも汲めなくはなく、老婢の拙ない言訳も強ひて追及せず

「さう、それは好い。ひろ子も薦をむしらなくなつたし、ひいきにしておやり」

私の取り做してやつた言葉に調子づいたものか老婢は、大びらでひろ子の店に通ひ、ひろ子の店の事情をいろ／＼私に話すのであつた。

私の家は割合に茶を使ふ家である。酒を飲まない家族の多くは、心気の転換や刺激の料に新らしくしば／＼茶を入れかへた。老婢

は月に二度以上もひろ子の店を訪ねることが出来た。

まきの言ふところによるとひろ子の店は、ひろ子の親の店には違ひないが、父母は早く歿し、みなし児のひろ子のために、伯母

夫婦が入つて来て、家の面倒をみてゐるのだつた。伯父は勤

つとめに

人で、昼は外に出て、夕方帰つた。生活力の弱さうな好人物で、

夜は近所の将棊所へ将棊をさしに行くのを唯一の楽しみにして

しょうぎしょ

ゐる。伯母は多少気丈な女で家の中を切り廻すが、病身で、とき

／＼寝ついた。二人とも中年近いので、もう二三年もして子供

が出来ないなら、何とか法律上の手続をとつて、ひろ子を養女にするか、自分たちが養父母に直るかしたい気組みである。それに茶店の収入も二人の生活に取つては重要なものになつてゐた。

「可哀かわいさうに。あれで店にゐると、がらり変つた娘になつて、くらいぢけ切つてるのでございますよ。やつぱり本親のない子ですね」とまきは言つた。

私は、やつぱり孤独は孤独を牽ひくのか。そして一度、老婢とその少女とが店で対談する様子が見度みだくなつた。

その目的の為めでもなかつたが、私は偶然少女の茶店の隣の表具店に写経の卷かんじく軸じくの表装を誂あつちへに行つて店先に腰かけてゐた。

私が出たより先に花屋へ使ひに出したまきが町向うから廻つて来て、少女の店に入つた。大きな「大経師」と書いた看板が距へだてになつてゐるので、まきには私のであるのが見えなかつた。表具店の主人は表装の裂地きれじの見本を奥へ探しに行つて手間取つてゐた。

都合よく、隣の茶店での話声が私によく聞えて来る。

「何故なぜ、今日はあたしにお茶を汲くんで出さないんだよ」

まきの声は相変らず突つかゝるやうである。

「うちの店ぢや、二十銭せん以上のお買物のお客でなくちや、お茶を出さないのよ」

ひろ子の声も相変らず、ませてゐる。

「いつもあんなに沢たくさん山の買物をしてやるぢやないか。常顧客おとくいさままだよ。一度ぐらゐる少ない買物だつて、お茶を出すもんですよ」

「わからないのね、をばさんは。いつもは二十銭以上のお買物だから出すけど、今日は茶滓ちやかすこ漉しの土瓶どびんの口金一つ七銭のお買物だからお茶は出せないぢやないの」

「お茶は四五日前に買ひに来たのを知つてゐるだろ。まだ、うちにたくさん沢山あるから買はないんだよ。今度、無くなつたらまた沢山買ひに来ます。お茶を出しなさい」

「そんなこと、をばさんいくら云つても、うちのお店の規則ですから、七錢のお買物のお客さまにはお茶出せないわ」

「なんて因いんごう業な娘つ子だらう」

老婢は苦笑し乍ながら立ち上りかけた。こゝでちよつと私の心をひく場面があつた。

老婢の店を出て行くのに、ひろ子は声をかけた。

「をばさん、浴衣ゆかたの背筋の縫目が横に曲つてゐてよ。直したげる

わ」

老婢は一度「まあいゝよ」と無愛想に言つたが、やつぱり少し後へ戻つたらしい。それを直してやりながら少女は老婢に何か囁ささやいたやうだが私には聞えなかつた。それから老婢の感慨深さうな顔をして私の前を通つて行くのが見える。私があるのに気がつかなかつたほど老婢は何か思ひ入つてゐた。

ひろ子が何を囁いて何をまきが思ひ入つたのか家へ歸つてから私が訊きくと、まきは言つた。「をばさん御免なさいね。けふ家の人たち奥で見えてゐるもんだから、お店の規則破れないのよ。破るととてもうるさいのよ。判つて」ひろ子はまきの浴衣の背筋を直す振りして小声で言つたのださうである。まきはそれを私に告げてから言ひ足した。

「なあにね、あの悪戯いたずらつ子がお茶汲んで出す恰好かつこうが早熟ませて、面白いんで、お茶出せ、出せと、いつも私は言ふんで御座ございますかね、今日のやうに伯母夫婦おばに気兼ねきがするんぢや、まつたく、あれぢや、外へ出て悪戯いたずらでもしなきや、ひろ子も身がたまりませんです」

少し大きくなつたひろ子から、家を出て女給にでもと相談をかけられたのを留めたのも老婢ろうひのまきであつたし、それかと言つて、家にゐて伯母夫婦の養女になり、みすく、一生を夫婦の自由になつて仕舞しまふのを止めやめさせたのもまきであつた。私の家の蔦の門が

何遍か四季交換の姿を見せつゝある間に、二人はそれほど深く立入つて身の上を頼り合ふ二人になつてゐた。孤独は孤独と牽ひき合ふと同時に、孤独と孤独は、最早もはや孤独と孤独とでなくなつて来た。まきには落着いた母性的の分別が備はつて、姿形さへ優しく整ふし、ひろ子にはまた、しほらしく健けなげ気な娘の性根が現はれて来た。私の家は勝手口へ廻るのも、この鳶の門の潜くぐりど戸から入つて構内を建物の外側に沿つて行くことになつてゐたので、私は、何遍か、少し年の距へだたつた母子のやうに老女と娘とが睦むつび合ひつゝ、鳶の門から送り出し、迎へられする姿を見て、かすかな涙を催したことさへある。

老婢は子供の時分に聞いた、上野の戦ひの時の、傷病兵の看護

人が男性であつたものを、女性にかへてから非常に成績が挙るやうになつた看護婦の起源の話（これは近頃、当時の生存者がラヂオで放送した話にもあつたが）を想ひ出した。また自分の体験から、貧しい女は是非腕ぜひに一人前の専門的職業の技倆ぎりようを持つてゐなければ結婚するにしろ、独身にしろ、不幸であることを諄じゆんじ々ゆんと諭さとして、ひろ子に看護婦になることを勧めた。そして学費の足しにと自分のお給金の中から幾らかの金を貢みつぎながら、ひろ子を赤十字へ入れて勉強べんきやうさせた。

私の家は、老婢らうひまきを伴つて、芝、白金から赤坂の今の家へ移

つた。今度は門わきの塀に葛がわづかに搦からんでゐるのを私が門へ蔓つるを曳ひきそれが繁しげり繁しげつたのである。

まきはすつかり老齡に入つて、掃除や厨くりやのことは若い女中に任せて自分はたゞ部屋に寝起きして、とき／＼女中の相談あずかに与あらばよかつた。

しかし、彼女は晩春から初夏へかけて葛の芽立つ頃の朝夕二回の表口の掃除だけは自分です。母子の如く往かき交かふひろ子との縁つなの繋つながり始まりを今もなほ若葛いきおいの勢いきおいよき芽立ちに楽しく顧かえりる為めであらうか。緑のゴブラン織のやうな葛の茂みを背景にして背と腰で二箇所に曲つてゐる長身をやら伸ばし、箒ほうきを支たへに背景を見返へる老女の姿は、夏の朝靄あさもやの中に象牙彫ぞうげほりのやうに潤うるん

で白く冴^さえた。彼女は朝起きの小児がよち／＼近寄つて来でもすると、不自由な身体に懸命な力で抱き上げて、若蔦の芽を心行くばかり摘み取らせる。嘗^{かつ}ては、あれほど摘み取られるのを怒つたその蔦の芽を——そしてにこ／＼してゐる。まきも老いて草木の芽に対する愛は、所^{しよせん}詮、人の子に対する愛にしかずといふやうな悟りでも得たのであらうか。

私は、それを見て、どういふわけか「命なりけり小夜^{さよ}の中山——」といふ西行の歌の句が胸に浮んでしやうがない。

蔦の茂葉の真盛りの時分に北支事変が始まつて、それが金朱の

いろに彩いろどられるころますく、皇軍の戦勝は報じ越される。

もう立派に一人前になつてゐたひろ子は、日常の訓練が役立つて、まるで隣へ招ばれるやうに、あつさり「では、をばさん行つて来るわ」とまきに言つて征地の任務に赴いた。

「たいしたものだ」まきは首を振つて感じてゐた。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第三卷 小説」冬樹社

1974（昭和49）年4月30日

初出：「むらさき」

1938（昭和13）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は

小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2005年2月22日作成

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蔦の門

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>